

有明町文化財調査報告書第1集

龍王峠古墳群

1994年3月

佐賀県有明町教育委員会



有明町文化財調査報告書第1集

龍王峠古墳群

1994年3月

佐賀県有明町教育委員会



序

この調査報告書は有明町の農村総合整備モデル事業による道路拡幅工事に先がけまして有明町教育委員会が実施しました有明町大字深浦に所在いたします龍王峠古墳群の発掘調査の記録であります。

調査は平成5年10月から11月にかけて実施し、古墳時代後期の横穴式石室を有する古墳3基を検出いたしました。周辺には県史跡であります龍王峠古墳などの古墳群が多くみられ、本調査は有明海沿岸の後期群集墳を知るうえでひとつの資料を提示いたしました。

ここに発掘調査報告書を刊行し、学術資料として、また貴重な文化財を町民の共有財産として大切に保存し、郷土の文化財に対する認識と理解、研究に役立てていただければ幸いです。この調査にあたって多大なる御協力をいただきました佐賀県教育委員会、有明町土地改良課ならびに地元の方々に対し心からお礼申し上げます。

平成6年3月

有明町教育委員会

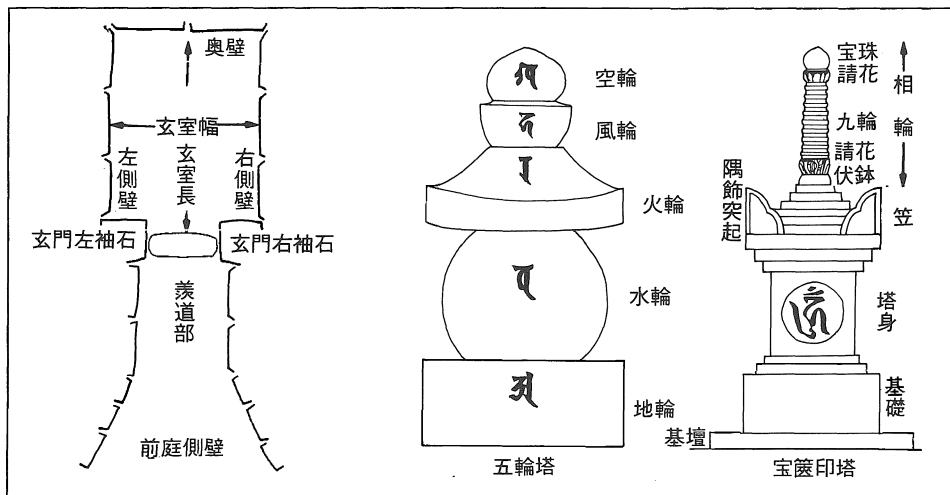
教育長 島 江 仁 琅

例 言

1. 本書は有明町の農村総合整備モデル事業による道路拡幅工事に伴い発掘調査を実施した龍王峠古墳群の発掘調査報告書である。
2. 地形測量および石室の実測は有限会社埋蔵文化財サポートシステムに委託し、その他の実測および写真撮影は小松が行った。
 空中写真撮影は有限会社空中写真企画に委託した。
3. 出土遺物の整理は県文化財課神埼八子事務所の協力を得た。なお遺物の整理は田中ハルミ、中島美須三が、遺物の実測・製図は江島美恵子・山口美佐子が、遺物の写真撮影は小松が行った。
4. 本書の執筆・編集は小松譲が行った。

凡 例

1. 本報告書中の遺物図番号は種別、遺構に関係なく一連番号とし、遺物図番号と図版遺物番号は同一である。
2. 地形測量の基準杭は工事関係の杭にあわせ、国土座標は用いなかった。また、挿図中の方位は磁北である。
3. 耳環の計測法はタテ×ヨコである。
4. 石室の各部名称と計測法および石塔の各部名称は次ぎのとおりである。



本文目次

I. 調査の概要	5
1. 調査に至る経過	5
2. 調査組織	5
3. 調査の経過	5
II. 遺跡の位置と環境	6
1. 地理的環境	6
2. 歴史的環境	6
III. 遺構と遺物	15
1. 遺構	15
(1) 1号墳	15
(2) 2号墳	17
(3) 3号墳	19
2. 遺物	19
(1) 2号墳出土遺物	19
(2) 3号墳出土遺物	23
IV. まとめ	24
V. 付編 龍王崎古墳群6号墳	25

挿図目次

Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1/60000)	7
2 かぶと塚石室	8
3 永池古墳石室	8
4 東明寺古墳石室	8
5 龍王峠4号墳石室	8
6 遺跡周辺地形図 (1/5000)	9
7 遺構配置図 (1/300)	13
8 右側壁加工痕1	15
9 右側壁加工痕2	15
10 1号墳石室 (1/60)	16
11 石塔、割石出土状況	17

Fig, 12	2号墳石室 (1/60).....	18
ゝ 13	3号墳石室 (1/60).....	20
ゝ 14	出土土器 (1/4).....	21
ゝ 15	出土石塔 (1/4).....	22
ゝ 16	龍王崎古墳群地形図 (1/1500).....	27
ゝ 17	龍王崎6号墳石室 (1/60).....	29

図 版 目 次

P L . 1	遺跡全景
ゝ 2	遺跡全景、1号墳全景、1号墳石室
ゝ 3	1号墳石室、2号墳石室、2号墳出土骨
ゝ 4	3号墳全景、3号墳石室、3号墳遺物出土状況
ゝ 5	3号墳出土土器、2号墳出土土器、2号墳出土石塔、3号墳出土石塔
ゝ 6	龍王崎6号墳石室、龍王崎6号墳石室奥壁

I. 調査の概要

1. 調査に至る経過

本発掘調査事業は有明町深浦地区の農村総合整備モデル事業の集落5号線の農道拡幅工事に伴うもので、遺跡の所在地は有明町大字深浦である。同地区内において町道拡幅事業も同時に計画されており、有明町教育委員会を経て佐賀県教育委員会文化財課にそれらの取り扱いについて照会された。それをうけて平成4年8月15日に有明町土地改良区、有明町教育委員会、佐賀県文化財課の三者で協議および現地踏査を実施した。農道拡幅計画地内には古墳3基の石材が露出しており、また計画地内においては黒曜石が散布しており確認調査の必要性を確認しあった。その後、平成5年5月13日に人力による確認調査を実施しその結果、古墳3基については記録保存による発掘調査を実施することになった。発掘調査費については開発事業主体である有明町が負担することになり、調査主体、事務局を有明町教育委員会におき、県文化財課からの調査員派遣を受けて発掘調査を実施することになった。

2. 調査組織

調査主体者	有明町教育委員会			
事務局	有明町教育委員会教育長		島江仁琅	
	〃	生涯学習課課長	中野悦郎	
	〃	社会教育係係長	小野好明	
	〃	〃	主事	丸田聖子
調査指導	佐賀県教育委員会文化財課指導係係長		天本洋一	
調査員	〃	〃	指導主事	小松 譲

3. 調査の経過

平成5年10月25日より調査を開始する。掘削機にて1、2、3号墳の表土はぎを行い、発掘機材などを搬入する。26日には1、2号墳を人力にて掘り下げる。2号墳からは表土より40～50cm掘り下げたところ骨片のほか近世の陶磁器、石塔が出土する。27日より3号墳の掘り下げを開始する。11月1日より埋蔵文化財サポートシステムによる地形測量および石室実測を始め、2日には空中写真撮影を実施する。道路拡幅工事であるため調査対象地が狭長で、墳丘の調査についてはトレンチによる石室掘り方の確認にとどめた。11月8日には有明南小学校6年生が見学にきた。これまでに石室および墳丘のトレンチ調査がほぼ終了し、諸般の事情から調査を中断した。

11月24日より調査を再開、1、2、3号墳の床面敷石をはずすといった追加調査を実施し、26日にはすべての調査を終了した。

II. 遺跡の位置と環境

1. 地理的環境

遺跡の所在する有明町は有明海の北西沿岸にあたり、佐賀県の南西部に位置する。北は白石町、南は塩田川を境にして鹿島市、東は有明海、西は杵島山地を挟んで塩田町になる。有明町の西方には標高300m前後の杵島山地が南北に連なる。杵島山の大部分の表層地質は安山岩で、いわゆる地山は赤褐色土で粘りっ気が強い。その裾部に安山岩質凝灰角礫岩と西側の麓部に砂岩がみられる。杵島山麓に築造される横穴式石室の石材にはこの安山岩が使用される。

杵島山北麓を有明海にむかって蛇行して流れるのは県西南部最大の河川六角川で、その北方にはサヌカイトの原産地である鬼ノ鼻山の連山が東西に横たわる。南北の山地にはさまれた六角川沿岸は帯状の平野が形成される。その上流は武雄川、潮見川が流れる盆地状の地形となり、山麓部には玉島古墳、東福寺前方後円墳、潮見古墳やおつぼ山神籠石などが築造される。有明海へとそそぐ六角川の下流は大きく蛇行するがその流路も時代とともに幾度となく変化を繰り返した様子が地形に残る。

杵島山南麓には嬉野町に源を發する塩田川が有明海にそそぐが、その河口南方には鹿島市街地が發達する。これら六角川や塩田川に挟まれた白石平野は佐賀平野の西部をしめ、杵島山地の麓から東に展開して有明海に接し、肥沃な沖積平野を形成している。白石平野は県下の米作地帯でもあり、その沿岸部は中世以降、干拓がさかんに行われてきた地域でもある。

龍王峠古墳群は杵島山南端の峰である白岩山（標高340.3m）から南東方向にのびる丘陵の端部に位置し、南麓には塩田川が流れる。遺跡からは有明海を望むことができ、谷をはさんで北側の丘陵には県史跡である龍王峠古墳群が位置する。

2. 歴史的環境

杵島山は肥前風土記逸文に「杵嶋郡の県南二里、一孤山あり。坤より艮を指し三峰相連なる。是を名づけて杵嶋という。」とあり日本書紀や万葉集にもその名がみられ、古くから聖山として崇められ、また歌垣山として親しまれてきた名山であり、現在歌垣公園として憩いの場を提供している。この由緒ある杵島山には稲佐神社をはじめ妻山神社、杵島神社などの古社が鎮座し、勇猛寺などの古寺が点在している。

この杵島山およびその周辺の旧石器、縄文時代の遺跡の分布についてはそれ以降の遺跡に比べ貧弱であり、石器類が若干発見されているのみで発掘調査によって確認された遺跡はない。本古墳群周辺では隣接して東方の谷部が竜王遺跡、丘陵の尾根上に深浦笹山遺跡、六通寺遺跡などの縄文時代の周知の埋蔵文化財の包蔵地が分布する。さらに周辺に目を広げると多良岳中腹に位置し押型文土器を出土した儀助平洞穴⁽¹⁾や鬼ノ鼻山周辺の茶園原遺跡⁽²⁾、多久三年山遺跡⁽³⁾

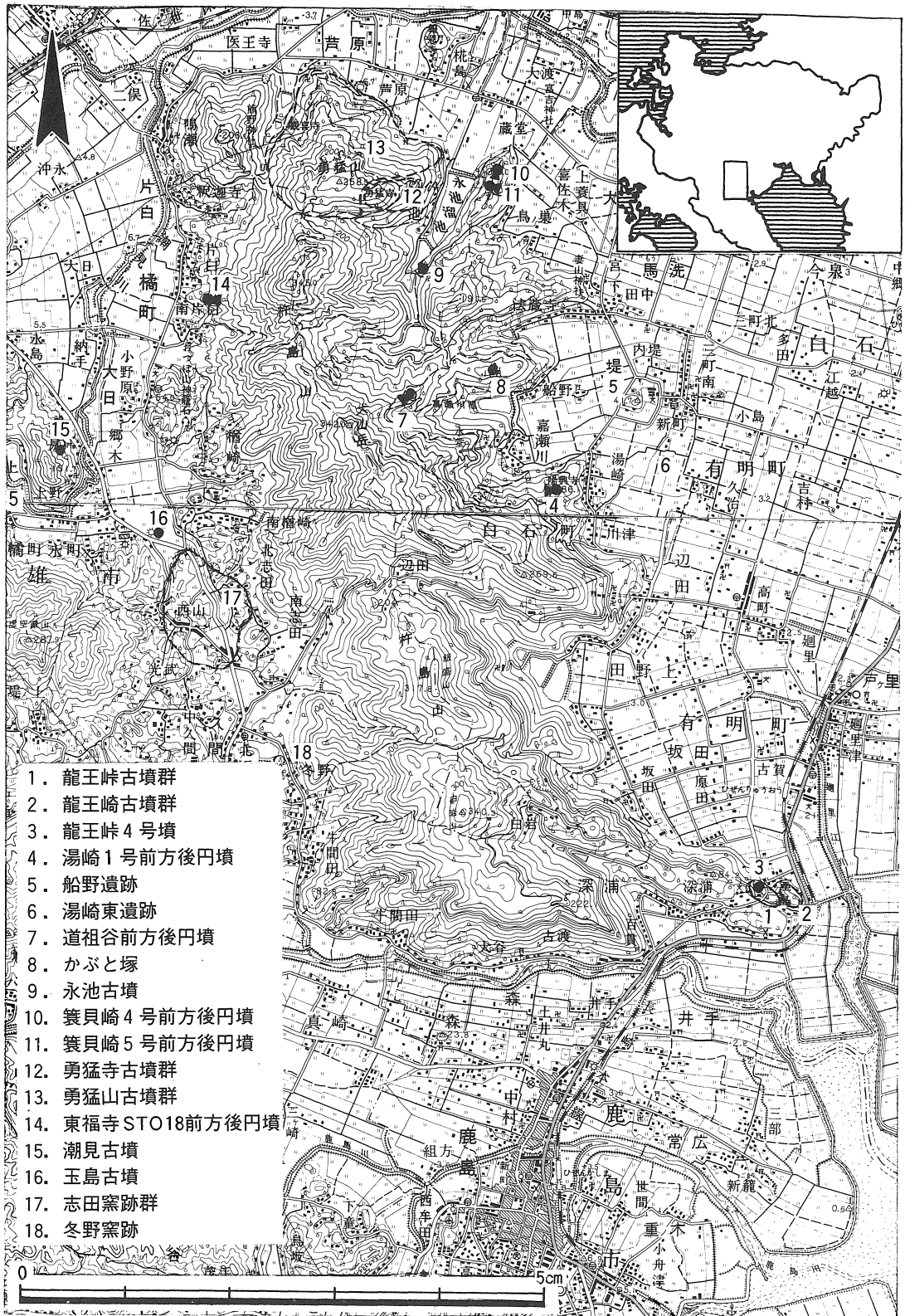


Fig.1 周辺遺跡分布図 (1/60000)

●●は主要古墳

などが分布する。

弥生時代の遺跡も有明町内にはさほどみられず、杵島山北麓から東麓の平野部にかけて分布する。武雄川沿いでJR武雄駅の南には弥生時代前期の環濠を検出した小楠遺跡⁽⁴⁾がある。環濠の平面形は北西-北東に長い卵形で推定規模は170m×140m程を測る。また、潮見川沿いで杵島山の裾部には甕棺群から細形銅剣1、細形銅戈1、青銅製鉞1を出土した釈迦寺遺跡⁽⁵⁾がある。六角川沿いの杵島山遺跡⁽⁶⁾では昭和38年箱式石棺内から方格規矩神獸鏡が発見され、昭和41年の調査では内行花文鏡、勾玉、管玉、素環頭刀子が箱式石棺内から出土しており、さらに昭和49年に再び調査が実施されるなど、その重要性は注目を受けた。また北方町東宮裾遺跡⁽⁷⁾からは巴形銅器、星形銅器などが出土しており弥生時代における一大文化圏を形成する。杵島山東方の白石平野には湯崎東遺跡⁽⁸⁾、船野遺跡⁽⁹⁾などがあり、これらの遺跡では白石平野の軟弱地盤に対する地盤沈下対策として礎板・横木などを施した掘建柱建物跡がみられる。

古墳時代にはいと杵島山およびその周辺に首長墓や群集墳が築造される。武雄盆地に矢の浦前方後円墳⁽¹⁰⁾・全長37mや大形円墳の玉島古墳⁽¹¹⁾、多くの馬具を出土した潮見古墳⁽¹²⁾が、杵島山西麓には東福寺ST018前方後円墳・全長約20mが、杵島山東麓には北から箕具崎4号前方後円墳・全長28m、箕具崎5号前方後円墳⁽¹³⁾・全長25m、道祖谷前方後円墳⁽¹⁴⁾・全長約70m、かぶと塚⁽¹⁵⁾、湯崎1号前方後円墳・全長41mなどが首長墓として位置づけられる。

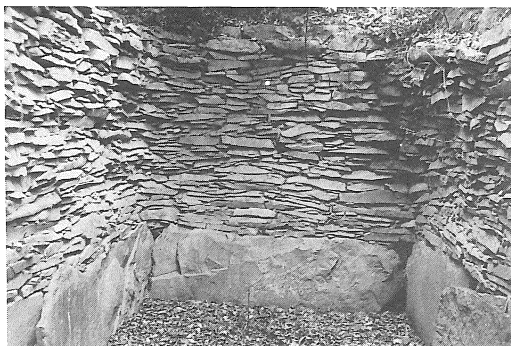


Fig.2 かぶと塚石室



Fig.3 永池古墳石室

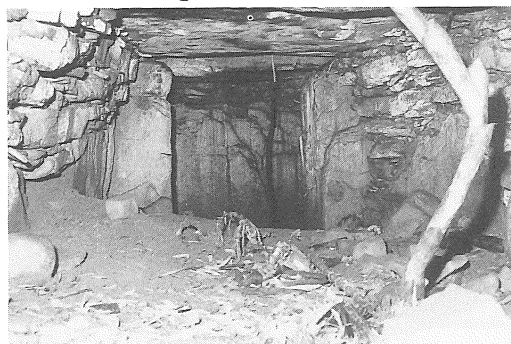


Fig.4 東明寺古墳石室



Fig.5 龍王峠4号墳石室

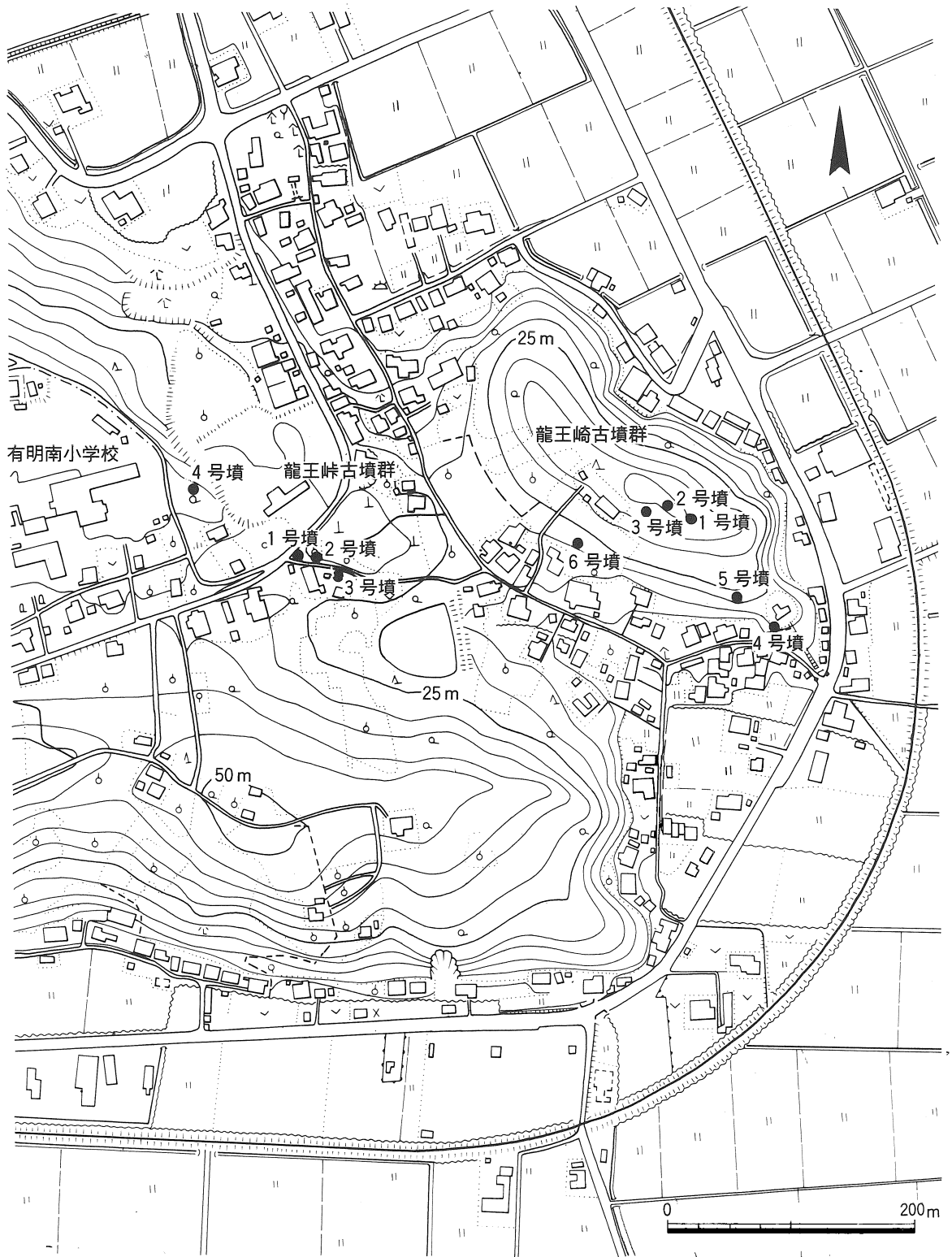


Fig.6 遺跡周辺地形図 (1/5000)

群集墳では北方町勇猛山古墳群⁽¹⁶⁾ や有明町龍王崎古墳群⁽¹⁷⁾ で発掘調査が実施され、その内容が明らかになっている。杵島山の最北端に位置する勇猛山の北中腹から山麓にかけて分布する勇猛山古墳群は横穴式石室を内部主体とする円墳である。6世紀後半を中心として造営される龍王崎古墳群は龍王崎古墳群から谷をはさんだ丘陵の尾根上や斜面上に築造され、1号墳からは金銅製胡禄金具や垂飾付耳飾、3号墳からは倣製七獸鏡、金銅製鈴など特筆される遺物が出土している。また6号墳の石室玄門左袖石には家形文様が線刻されており、他の古墳とともに県史跡に指定された。このような線刻壁画を有する古墳は杵島山周辺から多久市、小城町にかけて多く分布するが、自由画風線刻を施した古墳としては北方町永池古墳⁽¹⁸⁾、白石町妻山4号墳⁽¹⁹⁾などが著名である。永池古墳の線刻は閉塞石に使用されたと思われる扁平石にサシバを持った人物と台に乗った人物、および動物を素朴に線刻している。妻山4号墳は玄室側壁にゴンドラ型船や人物・馬を線刻する。このような自由画風線刻のほか当地域に特徴的にみられるのが格子紋様や鋸歯紋様などの幾何学紋様の線刻で勇猛山古墳群や多久市山の上古墳群ST014⁽²⁰⁾などがある。このほか有明町内には稲佐神社の背後に巨石を使った東明寺古墳や龍王崎4号墳⁽²¹⁾などがある。

古代以降の著名な遺跡として杵島山の西麓におつぼ山神籠石⁽²²⁾がある。これは土塁の基礎となる列石が丘陵を囲むように地形にあわせて楕円形状に一周し、途中に門跡2ヶ所、谷水を流すための水門4ヶ所が設けられている。おつぼ山神籠石から杵島山沿いに南下し塩田川を渡河すると多量の墨書土器や帯金具を出土した塩田町大黒町遺跡⁽²³⁾があり、このルートが古代より交通の要所であったことを伺わせる。

また、この杵島山西麓には平安時代の瓦窯跡である冬野窯跡⁽²⁴⁾や江戸中期以降の磁器窯である志田窯跡⁽²⁵⁾などの古窯跡群が散在する。

註

1. 木下之治1973『儀助平洞穴』鹿島市教育委員会
2. 西村隆司・松尾吉高1979『茶園原遺跡』多久市教育委員会
西村隆司1980『茶園原遺跡』多久市教育委員会
3. 杉原莊介・戸沢充則・安蒜政雄1983『佐賀県多久三年山における石器時代の遺跡』明治大学文学部研究報告考古学第9冊
4. 坂井義哉1991『小楠遺跡』武雄市教育委員会
5. 坂井義哉1990『釈迦寺遺跡』武雄市教育委員会
6. 木下之治1967『付 杵島山遺跡 勇猛山古墳群』佐賀県教育委員会
志佐輝彦1977『杵島山遺跡調査報告書』佐賀県立博物館
7. 柴元静雄1970「北方町東宮裾弥生遺跡」『新郷土』256
柴元静雄1970「北方町東宮裾弥生遺跡発掘調査報告書その2」『新郷土』257

8. 渡辺俊哉1989「湯崎東遺跡」『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告』7
渡辺俊哉1990「湯崎東遺跡」『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告』8
渡辺俊哉1991「湯崎東遺跡」『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告』9
9. 渡辺俊哉1992「船野遺跡」『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告』10
10. 原田保則1980『矢の浦遺跡』武雄市教育委員会
11. 木下之治1973『武雄市玉島古墳』武雄市教育委員会
12. 木下之治1975『武雄市潮見古墳』武雄市教育委員会
13. 柴元静雄ほか編1985『箕貝崎4・5号墳』北方町史 上巻 北方町史編纂委員会
14. 白石町教育委員会が1993～1994年にかけて調査を実施した。
15. 木原茂作ほか編1974「かぶと塚古墳」『白石町史』白石町史編纂委員会
16. 木下之治1967『勇猛山古墳群』佐賀県教育委員会
17. 木下之治1968『龍王崎古墳群』佐賀県教育委員会
18. 木下之治1973「北方町・永池古墳」『新郷土』286
柴元静雄ほか編1985「永池古墳」『北方町史 上巻』北方町史編纂委員会
19. 渡辺俊哉1994『妻山古墳群4号墳』白石町教育委員会
20. 西村隆司1984『東多久バイパス関係埋蔵文化財調査報告書』佐賀県教育委員会
21. 有明南小学校の東方に現存する複室両袖型横穴式石室。龍王崎古墳群にはいることから4号墳とした。
22. 鏡山猛1965『おつば山神籠石』佐賀県教育委員会
小田富士雄1963「佐賀県おつば山神籠石の調査」『九州考古学19』
原田保則1979『史跡おつば山神籠石』武雄市教育委員会
23. 峯崎幸清1994『大黒町遺跡発掘調査報告書』塩田町教育委員会
24. 松尾禎作1940「冬野瓦窯址」『佐賀県史跡名勝天然記念物調査報告7』
25. 小木一良・横糸均・青木克巳1994『志田窯の染付皿』里文出版
大橋康二1991『塩田町志田西山1号窯跡』佐賀県立九州陶磁文化館

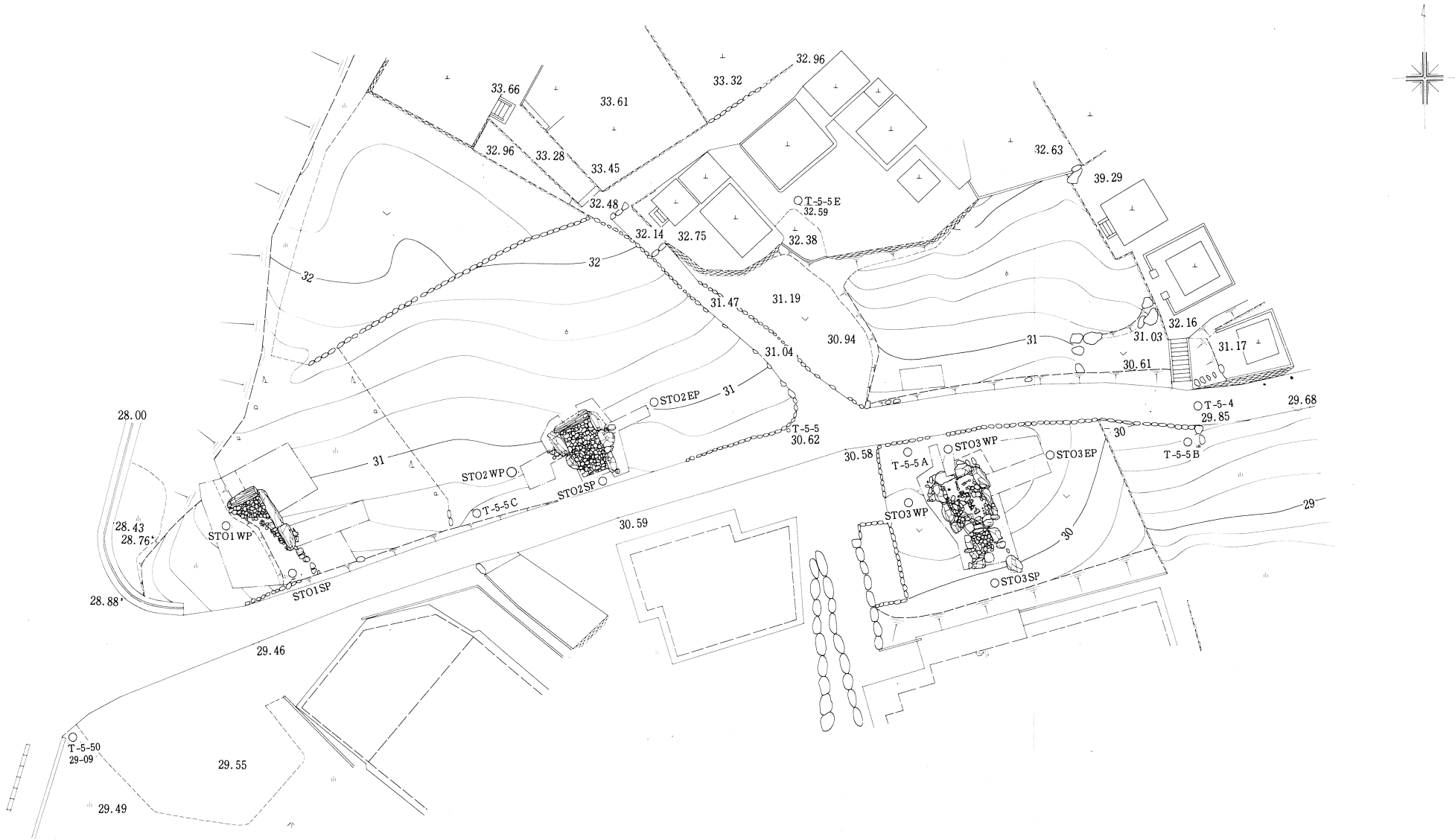


Fig.7 遺構配置図 (1/300)

Ⅲ. 遺構と遺物

1. 遺構

(1) 1号墳

調査した3基の古墳のうちでは最も西方に位置し、西方17mには2号墳が築造される。墳丘は削平を受け現状では墳丘盛土は認められず、雑木林の中に石室石材が露出していた。調査区および諸般の事情から内部主体を中心にした調査で墳丘についてはトレンチによる土層観察、記録のみとしたため墳丘規模などについては不明である。

石室掘り方は石室石材にそっており、奥壁側で深さ0.9mである。奥壁をすえるために、その部分を溝状に深く掘る。奥壁側の掘り方埋土はしまりのない褐色土と地山ブロックと礫を混入した茶褐色土で径10~20cmの礫を詰める。

内部主体は南斜面に向かって開口する単室の横穴式石室である。石室主軸はN25.5°Wである。石室の左側壁は大きく削平され奥壁、右側壁石材のみ遺存するのみで石室型式は不明であるが袖部構造は持たない無袖型横穴式石室と思われる。

石室平面形態は長方形で、規模は石室全長5.2m、玄室長3.4m、玄室幅は推定1.8mである。石室使用石材はきわめて大きく、奥壁は1.5m×1.7m、厚さ0.5mの扁平な方形石材1石を立てる。右側壁は奥壁を挟むように奥壁側から1.6m×2.3m、1.8×1.4m、厚さ0.5~0.6mの扁平石材2石を立て、側壁石材が互いに接する面は平坦に加工される(Fig6、7)。奥壁、側壁の上端高は同じで約1.8mを測り、この奥壁、側壁に直接あるいは1段石材を積んで天井石を架構したものと考えられる。

また、側壁からハの字形に開く長さ1.8mの石列があり、前庭側壁と思われる。

床面には径20~30cmの転石をほぼ全面に敷き詰めているが、敷石は黒く炭火していた。床石直上にて炭火物や埋土中より貝殻を検出した。敷石を取り除き床面の精査をしたところ右側壁と平行する幅50cm、深さ15cmの断面長方形の溝跡を検出した。埋土は地山の赤褐色土と茶褐色土の混合土で出土遺物はない。この溝は玄門側右側壁の下方にのびていることから、排水溝とは考えられず、その性格については不明である。(PL3-1)

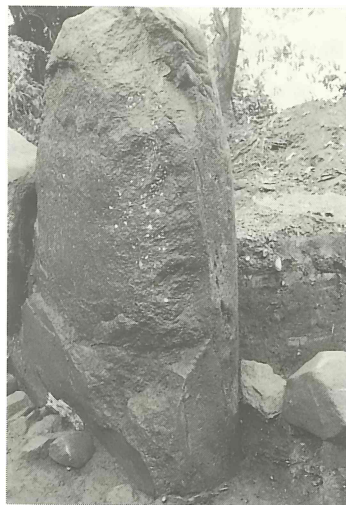


Fig.8 右側壁加工痕1.



Fig.9 右側壁加工痕2.

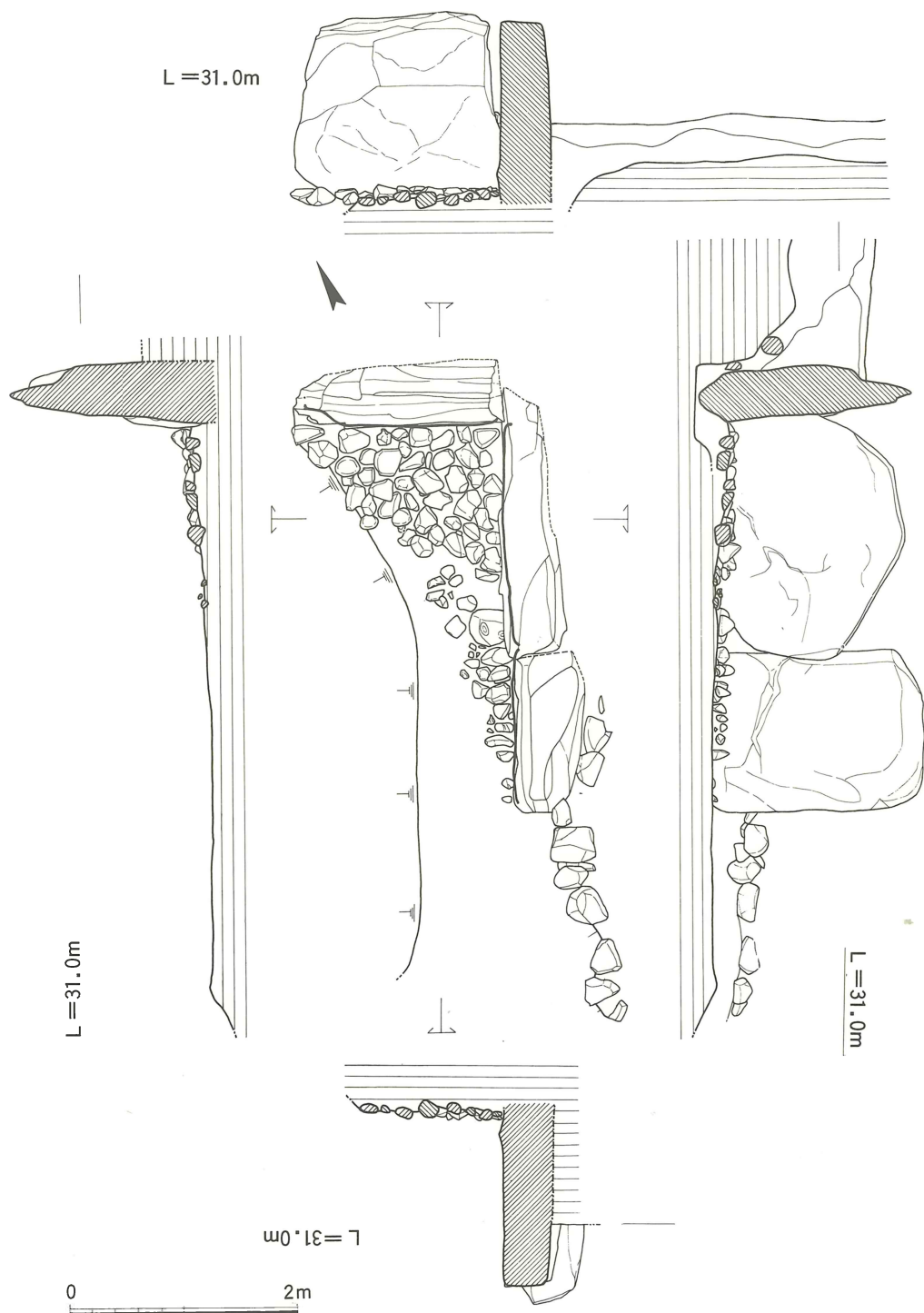


Fig.10 1号墳石室 (1/60)

出土遺物は床面敷石の下から耳環1個のみである。

(2) 2号墳

調査した3基の古墳の中央に位置し、標高は1号墳と同じである。東方20mには3号墳が築造される。他の2基の古墳と同じように墳丘は削平され茶畑の中に石室石材の上部が露頭し古墳であることは周知されていた。玄門から羨道にかけては農道により破壊され玄室のみ遺存する。従って石室型式は特定できないが両袖型であると推定される。南側斜面に向かって開口し、主軸はN19.5° Wである。

石室掘り方は右側壁側が広く掘り方の角度もゆるやかであるのに対し、左側壁側掘り方は狭くその角度も垂直に近い。掘り方内の裏込め土も版築状といえるものでなく地山の赤褐色土と褐色土を詰める。右側壁側の掘り方が広い理由として、右側壁石材の形状が考えられる。左側壁側は扁平石材を選択しているのに対し、右側壁側は厚みのある石材を配するため掘り方も広くなる。



Fig.11 石塔、割石出土状況

玄室平面形態は長方形で規模は玄室現存長2.8m、玄室幅約2mである。奥壁は2m×2mの扁平な方形石材一石を垂直にたてる。右側壁は奥壁側から1.3m×0.9m、1.4m×0.9mの長方形石材をやや内傾気味に縦位にたて、玄門側の0.9m×1.0mの長方形石材との間に径0.2m程の割石を積み上げる。左側壁は奥壁側から1.1m×1.3m、1.1m×0.9mの長方形石材を配する。左右側壁とも腰石上端の高さは同じで、奥壁の1枚石のみ突出して大きく側壁からの目地も通らない。また、右隅角は側壁が奥壁を扶む。床面には0.2~0.3mの転石をほぼ全面に敷き詰める。床面から銅地金張の耳環1個が出土した。このほかST02古墳の廃土中より耳環1個が出土した。須恵器・土師器は出土していない。

ところで、玄室を表土から0.4~0.5m程掘り下げたところ、骨および近世の陶器甕、磁器皿が出土した。さらにその下からは五輪塔、宝篋印塔を検出した。これらの石塔を検出した面には割石が散乱しており、中世において古墳の再利用が考えられる。古墳主軸上のベルトの土層観察では整地などの所見は得られなかった。また出土骨は近くの寺にて再埋葬した。

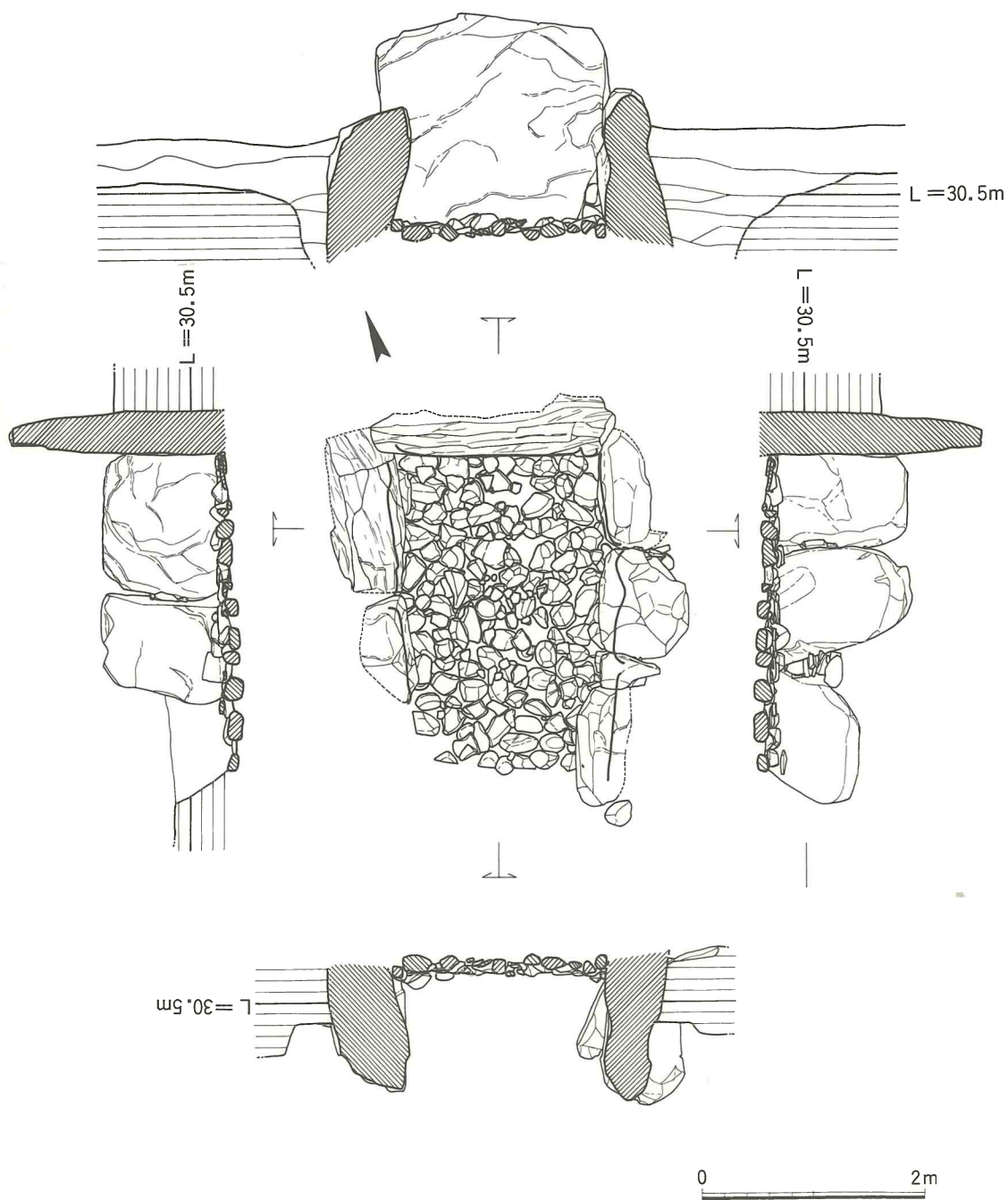


Fig.12 2号墳石室 (1/60)

(3) 3号墳

3基のうちでは最も東方に位置し、標高もほかの2基に比べやや低い。墳丘は削平を受け、人家の庭に石室石材の上部が露出しており古墳であることは周知されていた。内部主体は南斜面に向かって開口する単室の両袖型横穴式石室である。羨門左袖石が内側に突出しており、複室とも考えられるが、右袖部が不明の為、単室とした。しかし羨道部（前空）から須恵器が出土していることは、その石室内空間利用を示唆している。奥壁側と右側壁側にトレンチを設定して石室掘り方の確認を行った。奥壁側に比べ右側壁側の掘り方が狭く、深さは約1.2mを測る。掘り方内埋土は分層できず、腰石を配したのち地山の礫混じりの赤褐色土を一気に詰めている。墳丘基底面には旧表土が残っており、石室構築に先行しての墳丘基底面の形成ではさほど大規模な整形を行わなかったと推定される。

玄室平面形態は長方形で、規模は石室全長5.1m、玄室長2.7m、玄室幅2.0mを測る。石室石材は1、2号墳に比べ小形であり、奥壁腰石は1.3m×0.9mほどの石材2石をやや内傾気味に縦位に立てる。玄室左右側壁はそれぞれ3石を配するが玄門側に向かって小形になる。右側壁腰石は奥壁側から1.2m×1.3m、0.9m×1.0m、0.8m×0.6mの石材を配し、隙間には安定するように小石を挟む。左側壁腰石は奥壁側から1.1m×1.0m、1.2m×1.1m、0.8m×0.6mの石材を配するが、奥壁腰石上端高とそれに接する左右側壁腰石の上端高とさらに左羨門のそれが同じで、本来この高さで目地が通ったと思われ、これが石室構築の第一工程にあたると思われる。

玄門部は左右袖石とも柱状の石材を用いるがどちらも上半部は割り取られ欠失する。玄門幅は0.6mを測り、玄門床面には仕切り石2石を並べる。羨道部は左右側壁腰石とも2石づつ配する。羨門部は左羨門に高さ1.2mの柱状石材を内側に突出して立てる。右羨門は不定形石材を用いており、木の根により攪乱される。羨門床面には扁平な円形の仕切り石を配する。羨道床面には径0.2mの転石を敷き詰める。玄門仕切り石直上および羨道床面直上から須恵器が出土した。また、玄室より耳環2個が出土した。

2. 遺物

出土遺物はFig12、13に種別ごとに示す。いずれの古墳からも出土遺物は少なく、須恵器、陶磁器、石塔などがある。1号墳からの出土遺物は床面敷石の下から耳環が1個出土したのみで土器類は出土していない。以下、Fig11、12について古墳ごとに記述する。

(1) 2号墳出土遺物

18、19は耳環、ともに銅地金銅張り。18の外径は2.1×2.4cm、19の外径は1.8×2.0cmを測る。18は2号墳廃土中より、19は玄室床面敷石下から出土した。

20は磁器染付の台付き皿。底部は蛇の目釉はぎ、楕円形に歪む。21は陶器の甕。内外面施釉し

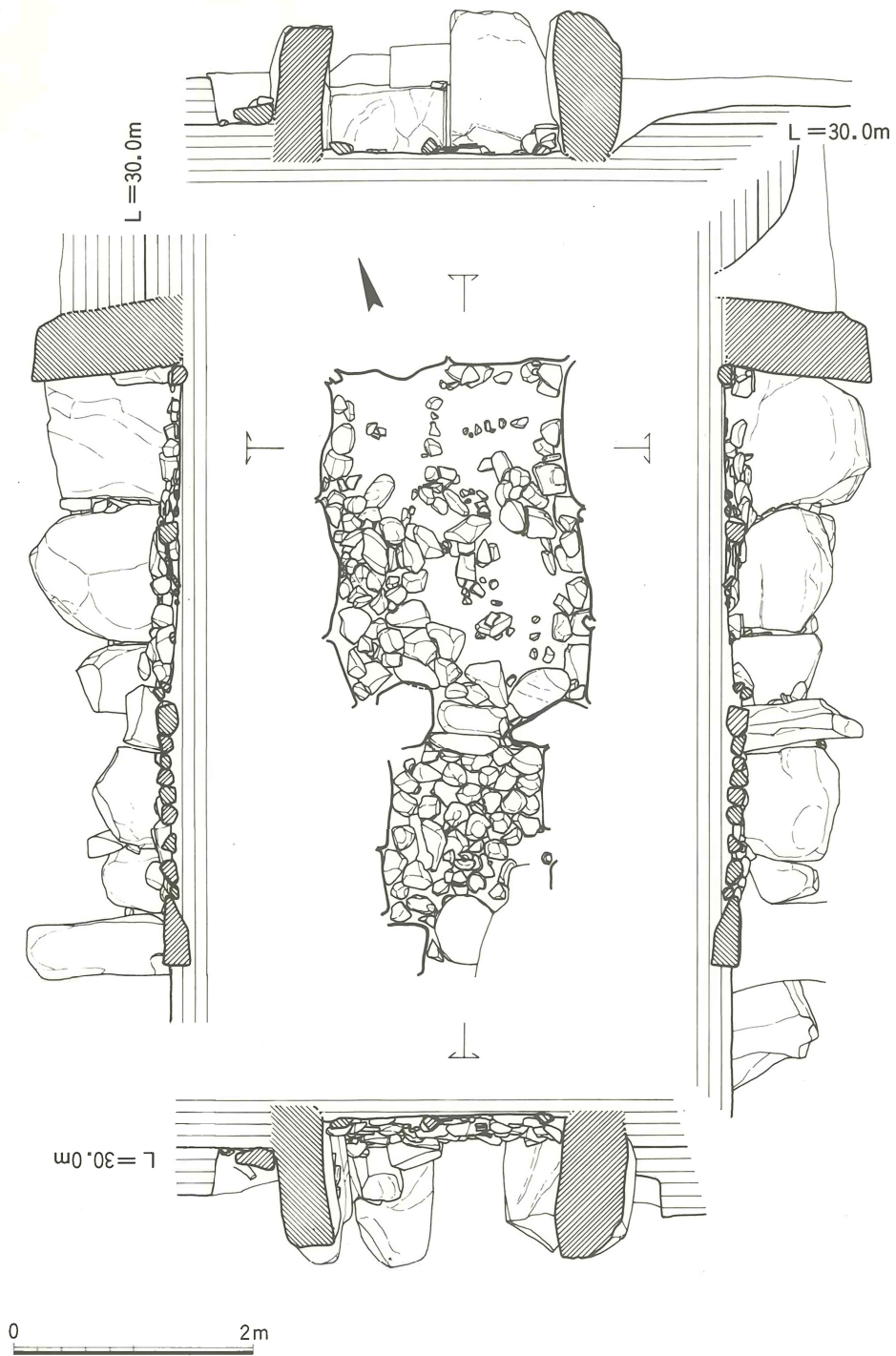
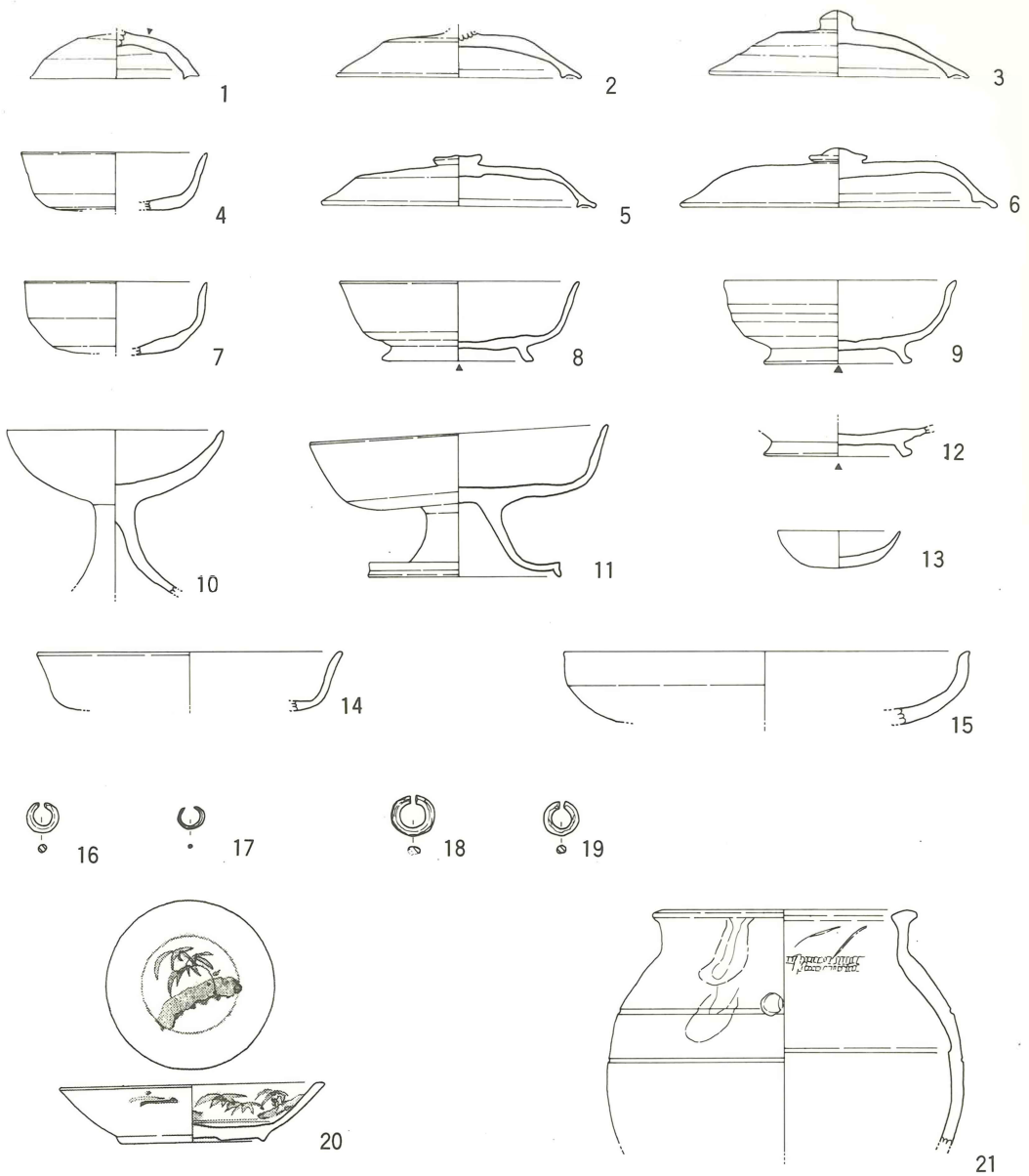
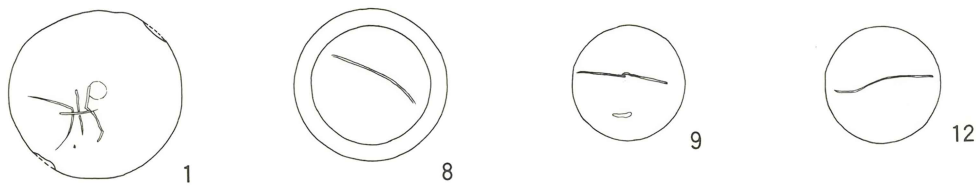


Fig.13 3号墳石室 (1/60)



ヘラ記号



0 10 cm

Fig.14 出土土器 (1/4)

1 ~ 17 3号墳出土
18 ~ 21 2号墳出土

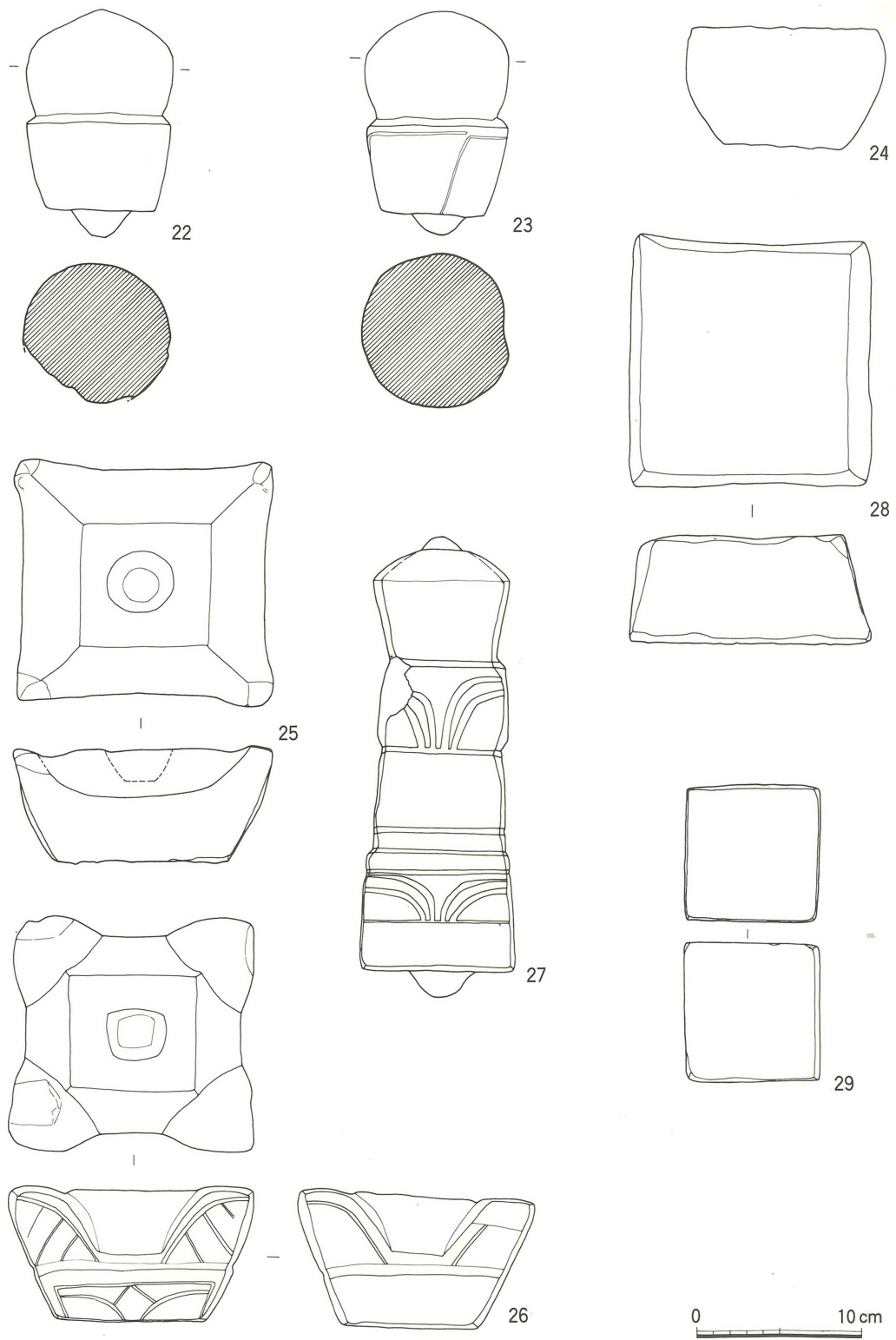


Fig.15 出土石塔 (1/4)

22、24、25~28 2号墳出土
 23、29 3号墳出土

茶褐色を呈する。肩部内面は格子目叩き跡が残る。ともに玄室埋土中より出土した。

22、24、25、26、27、28は石塔類である。22、24、28は五輪塔である。22は空輪、風輪部で断面円形。24は水輪、28は地輪である。25、26、27は宝篋印塔である。25、26は笠部で、四方に隅飾突起をつける。26の側面は線刻による装飾を施す。27は相輪で請花部は線刻を施す。

これらは玄室の表土を0.4~0.5mほど掘り下げたところ割石とともにこれら石塔類が出土した。

(2) 3号墳出土遺物

1~15は須恵器、1、2、3、5、6は杯蓋。1は内面に断面三角形のかえりがつき、天井部は丸みをもち、ヘラケズリを施す。つまみは欠損し、天井部外面にヘラ記号有り。口径7.2cm。2は口縁部内面に断面三角形のかえりがつく。天井部は回転ヘラケズリを施し、中央のつまみは欠損する。口径11cm。3は内面にかえりがつき、天井部の狭い範囲にヘラケズリを施す。宝珠形のつまみがつく。口径11.6cm。5は内面にシャープなかえりがつき、天井部は平坦で回転ヘラケズリを施し、鈕状のつまみがつく。胎土は緻密。口径12.8cm。6は内面にかえりがつき、天井部は平坦で回転ヘラケズリを施し、鈕状のつまみがつく。口径14.2cm。

4、7、8、9、12は杯身。4、7は底部平坦で体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。4の復元口径9.8cm、器高3.1cm。7は底部ヘラ切り未調整、口径9.6cm、器高3.9cm。8、9、12は高台付き杯身。高台部はハの字状に開く。色調は赤褐色~橙褐色を呈する。8、9、12は底部外面に同様のヘラ記号有り。8は口径12.6cm、器高4.3cm。9は口径12.1cm、器高4.5cm。12は高台部のみ残存。

10、11、14は高杯。10は杯底部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がる。口径11.4cm。11の杯底部は平坦で口縁部は外上方に開く。短い脚部が付く。口径15.8cm、器高7.7cm。14は口縁部のみ残存、復元口径16.0cm。15の器種は不明、高杯と考えた。底部ヘラケズリで器壁は厚い。13はミニチュア形の杯。短頸壺の蓋になる可能性も有り。底部、不定方向のヘラケズリ。口径6.4cm、器高1.9cm。

16、17は耳環。銅地金張り、ともに断面円形。16の外径は1.6×1.7cm。17の外径は1.3×1.5cm。

1は玄門仕切り石の直上から、2、5、6、9、11は羨道部でも羨門に近い位置で敷石直上から出土した。16、17は敷石の隙間にて検出した。ほかは石室埋土の中から出土した。

23は五輪塔の空・風輪部で風輪部に線刻を施す。29は宝篋印塔の塔身部か。

IV. ま と め

有明海は干満の差が激しい内海として知られるが、多くの自然の恵みを人々に与えてきた。玄海灘沿岸の古代文化に比べ有明海沿岸のそれはこれまで注目されることが少なかったが、近年の研究の進展に伴い環有明海文化圏の見直しがなされるようになってきた。古墳時代後期においても同様であり、杵島山から多久、小城にかけて、南は長崎県小長井町、高来町にいたり、石室に線刻文を有する古墳が多く分布することが早くから知られており、ひとつの文化圏を形成している。しかし古墳の調査といえば、昭和40年代に龍王崎古墳群や勇猛山古墳群の調査が実施されたのみで近年になって挂甲を出土した諸富町石塚古墳のほか白石町道祖谷前方後円墳や線刻文をもつ妻山4号墳などの調査が行われ、ようやく政治的、文化的内容が少しずつ明らかになりつつある。本古墳群の調査もその一翼を担えばと思う。

ところで、今回調査を実施した3基の古墳はいずれも、6世紀後半から7世紀にかけて営まれた群集墳であり、有明海を眼下に見下ろす丘陵の南斜面に築造される。本調査区の北側の墓地内には古墳らしき地形も認められ、この南斜面にはあと数基の古墳が築造されていたと考えられる。この丘陵の頂部先端で有明南小学校の東、1号墳から北西約100mの位置には4号墳がある。調査を実施した3基の古墳及びその周辺古墳、そして4号墳を含めて龍王崎古墳群として周知化されている。その中でも複室両袖型の横穴式石室をもつ比較的大型の古墳である4号墳は立地的にも本古墳群の盟主墳的な存在であることが伺える。また、谷をはさんだ東方の丘陵には多くの副葬品を出土した5世紀末および6世紀後半の古墳群である龍王崎古墳群が築造され杵島山系南端の群集墳を形成する。

今回は横穴式石室を内部主体とする3基の古墳の調査を実施したが、農道拡幅工事に伴う調査であったため調査区も限られ墳丘などについての細かな調査は実施できず、石室を中心とした調査となった。1号墳石室は無袖型と考えているが、残存する右側壁2石は加工されており石室構築技術を考える上で注目される。すなはち、大形の扁平石材の小口面を平坦に加工し、側壁石材同士が互いに接する面をより密着させるようにする。このように、側壁壁面を敲打して壁面をより平坦に仕上げたり、同様に石材小口面を削ったりする技法は古墳時代後期でも比較的新しい時期に出現し、さらに新時代の切石技法にもつながるものと考えられる。

本古墳群の立地は杵島山系から北東方向につきだした丘陵の先端部に位置し、塩田川沿いに武雄方面にぬけるコースと杵島山東麓を北上するコースの分岐点である。前者のコース沿いには多量の墨書土器や帯金具を出土した塩田町大黒町遺跡や武雄市おつぼ山神籠石など古代の著名な遺跡もあり古代官道路線にも比定されている。本古墳群の立地する丘陵先端部は2つのコースの分岐点でもあり、いわば交通の要所である。龍王崎古墳や龍王崎古墳群を営んだ集団やその被葬者は、この要所の地を治めあるいはこの地に暮らした人々であることが伺われる。

V. 龍王崎古墳群6号墳

1. はじめに

龍王崎古墳群の調査は予想される開発事業に先立ち有明町教育委員会が主体となり、県教育委員会の協力のもと昭和42年4月1日～8日にかけて実施された。このとき1、2、3、4、5号墳の調査を行ったが6号墳については玄室内に天井石が崩落しているため調査が困難になり前室のみの検出で終わった。この時すでに前門左袖石の家屋文様の線刻を発見し、その重要性は注目されていた。昭和49年11月に再び6号墳の調査が実施され石室実測図が作成され、昭和52年には県史跡に指定された。昭和42年の調査については木下之治1967『龍王崎古墳群』佐賀県教育委員会として報告書が刊行されており、昭和49年の調査は木下之治1975「龍王崎古墳群第6号墳」『新郷土311』として報告されている。

平成3年度、龍王崎古墳群を「古今の森歴史公園」として整備保存し、町民の憩いの場、学習の場として活用するため龍王崎古今の森整備構想が策定され、同時に龍王崎古墳群の地形測量図作成および6号墳ほかの石室実測図作成も行われた。ここに掲載する地形測量図および6号墳石室実測図はこの際に作成されたものである。昭和42年、49年の調査はきわめて短期間のもので、その記録・報告も完全ではないためこの付編はこれを補うためのものである。

2. 古墳群の位置と概要

杵島山の南端の峰である白岩山（標高340.3m）から南東方向に細長く伸びる丘陵の先端部に位置する。古墳群がある丘陵の南側には谷が入り、古墳が散在する丘陵は一見独立丘陵状を呈する。この独立丘陵の南東端部には海童神社があるが、その境内背後の丘陵の尾根上や斜面上に円墳が現存する。この古墳群は破壊消滅古墳も含めて20基前後からなると考えられる。1、2、3号墳は丘陵の尾根上に築造され、1号墳からは金銅製胡禄金具や垂飾付耳飾、3号墳からは倣製七獣鏡、金銅製鈴など特筆される遺物が出土しており5世紀末から6世紀初頭に位置づけられる。4、5、6号墳は丘陵の南斜面に築造されるが、4号墳・5号墳は大部分を破壊され4号墳石室は左側壁のみ、5号墳石室は玄門から前庭側壁のみ残存する。4号墳・5号墳の出土遺物には鉄刀、鉄鏃、須恵器などがあるものの詳細は不明でそれらの築造時期を特定することはできない。

6号墳は丘陵の南側斜面・標高約20mに位置し、周囲は蜜柑畑として開墾される。現状では玄室・前室・羨道部の天井石はなく玄門楣石のみ架構する。墳丘の調査は実施されていないため詳細は不明であるが葺石や埴輪などは見当たらない。

出土遺物には耳環、金銅製鋌留金具、鉄鏃、須恵器片、土師器片の他、中世の土師器片、寛永通宝などがある。また前室には再埋葬人骨と供献したような状態で磨製石斧が出土した。この

人骨は周辺に散在していた遺物から江戸時代に再埋葬された遺体であろうと考えられる。

3. 内部主体

石室主軸を南北方向にとり、斜面谷側の南方に向かって開口する複室両袖型の横穴式石室である。石室規模は全長8.4m、玄室長3.8m、玄室幅3.8m、前室長1.5m、前室幅2.5mを測る。玄室平面形態は長方形で前室平面形態は幅広の長形で、玄室幅と前室幅が同じであるのは石室構造のためである。また前庭側壁の平面形は入り口部に向かって逆ハの字状にすぼまる。石材は杵島山系に産出する安山岩である。

玄室奥壁は腰石に1.8m×2.2m程の方形石材1石を配し、その上に横長石材1石を積み上げる。右側壁腰石は奥壁側から1.9m×1.2m程の石材を縦位に、1.3m×2.6m程の石材を横位に配し、腰石上方は径1m、厚さ0.4~0.5m前後の扁平石材を積み上げる。遺存壁高は3.3mを測る。左側壁腰石は奥壁側から1.7m×2.3m、1.4m×2.7mの長方形石材2石を横位に配し、その上方は3~4段の石積みが残る。遺存壁高は2.8mを測る。この前室よりの左側壁腰石は玄室から前室にかけて配されており、その南に接する前室左側壁腰石も前室から前庭部にかけて配され、この石室の特徴になっている。前室右側壁腰石はさほど大形の石材を用いなく前室長の横長石材を配し、その上に3段の石材を積み上げる。玄室床面中央には主軸に斜行して板状石材を立て、屍床らしきものをつくる。

玄門部は両袖石の直上に楣石を架構し、床面には玄門幅の仕切り石を置く。玄門幅は0.9mを測る。左袖石前壁幅は1mを測り、玄室側から玄門を見た場合、左袖石が突出した感じを受ける。

前門部は高さ1.5~1.6mの柱状石材をたて、床面には前門幅の仕切り石をおく。前門幅は0.8mを測る。玄門袖石高に比べ前門のそれが0.1~0.2mほど低い。

本石室構造で特徴ある点として側壁と袖石の構築方法がある。すなはち佐賀県内に一般的にみられる袖部構造は、袖石が両側壁の石材に挟まれ、組み込まれる。それに対し本石室の玄門左袖石と前門左袖石は側壁に組み込まれることなく、側壁から独立して柱状石材を立てる。玄室左側壁腰石は玄室から前室にかけて配されており、前室左側壁腰石は前室から前庭側壁にかけてのびる。結果的に石室平面形は玄室幅と前室幅が同じになる。この石室構造の違いはそのまま構築工程の違いを表すものであろう。一般的な石室は腰石を配し袖石をたてるのは同一工程であるが、本石室の場合、腰石を据えた後袖石をたてるという工程になる。同様の石室構造をもつ古墳として北方町永池古墳や有明町龍王峠4号墳がある。

玄門左袖石の前室側壁面には家屋文様の線刻が施されており、本古墳を著名ならしめている。この家屋文様は全高41cm、棟の長さ42cm、基礎の部分38cmで屋根の部分に5本と腰の部分に4本の縦線が刻まれる。

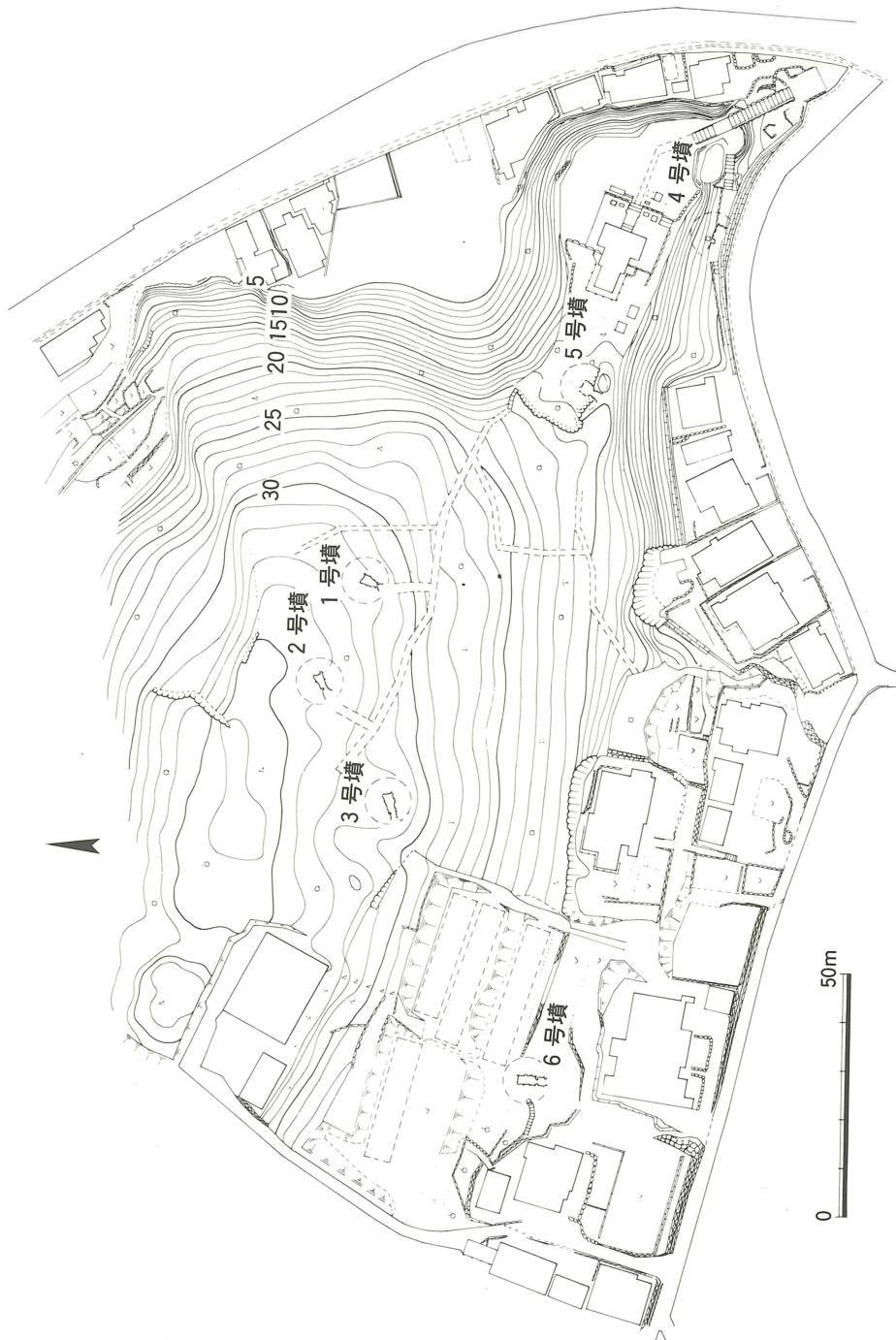


Fig.16 龍王崎古墳群地形図 (1/1500)

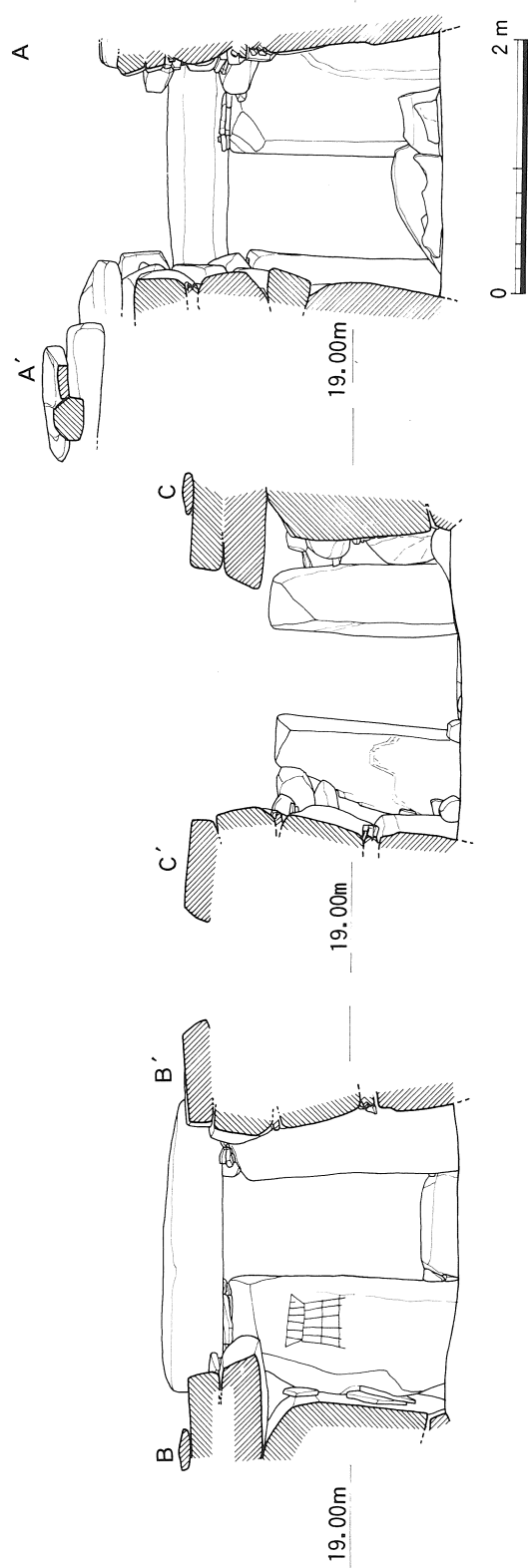
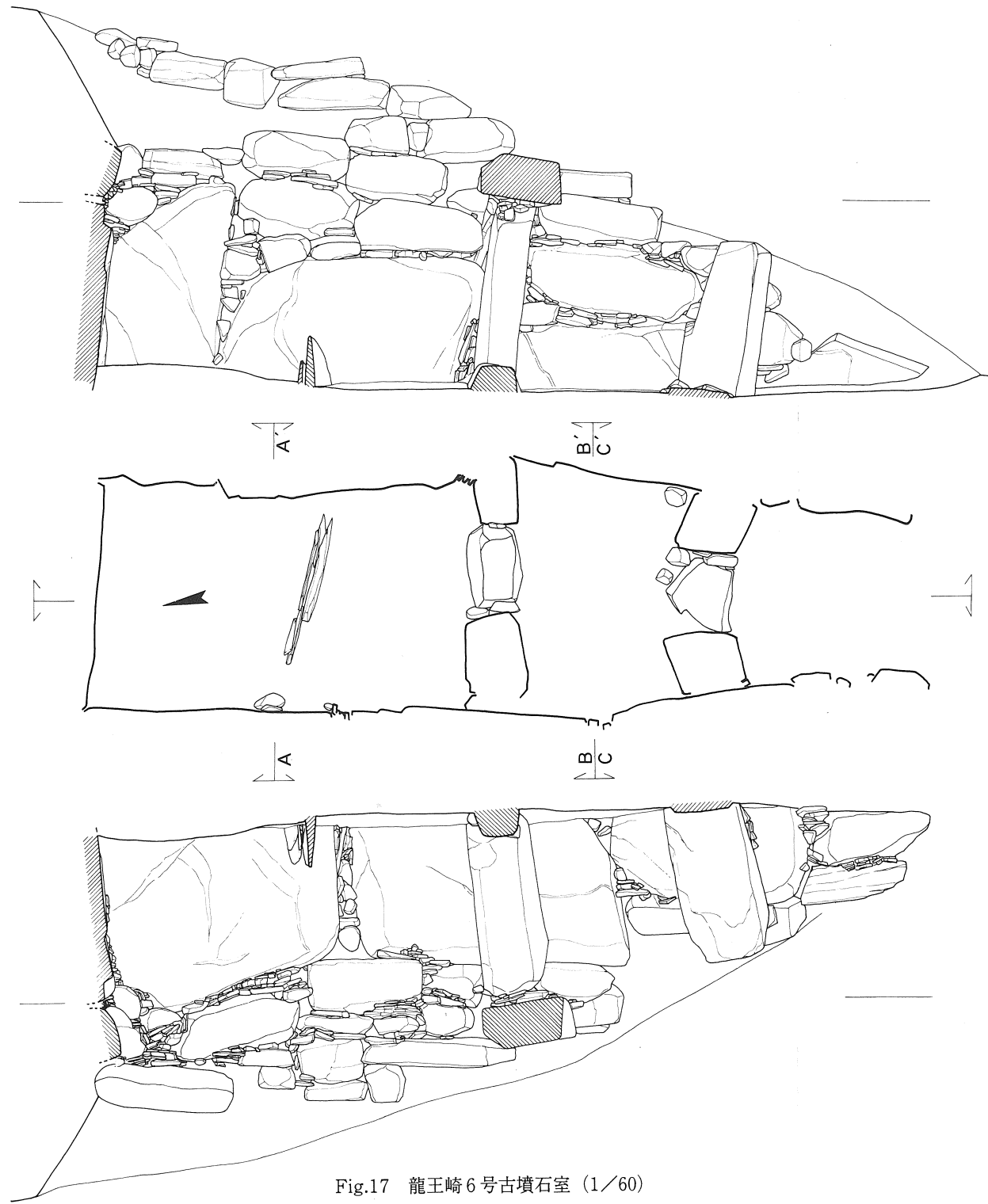
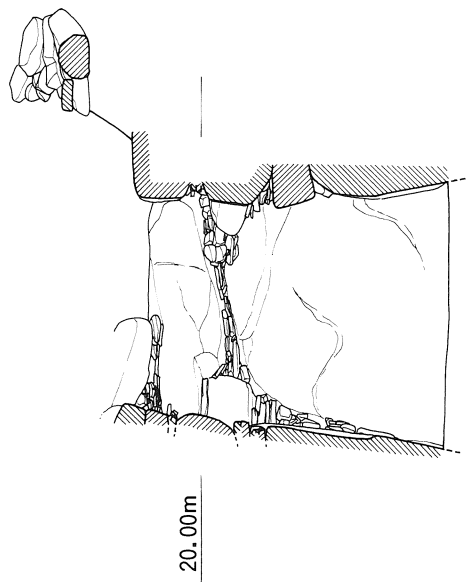
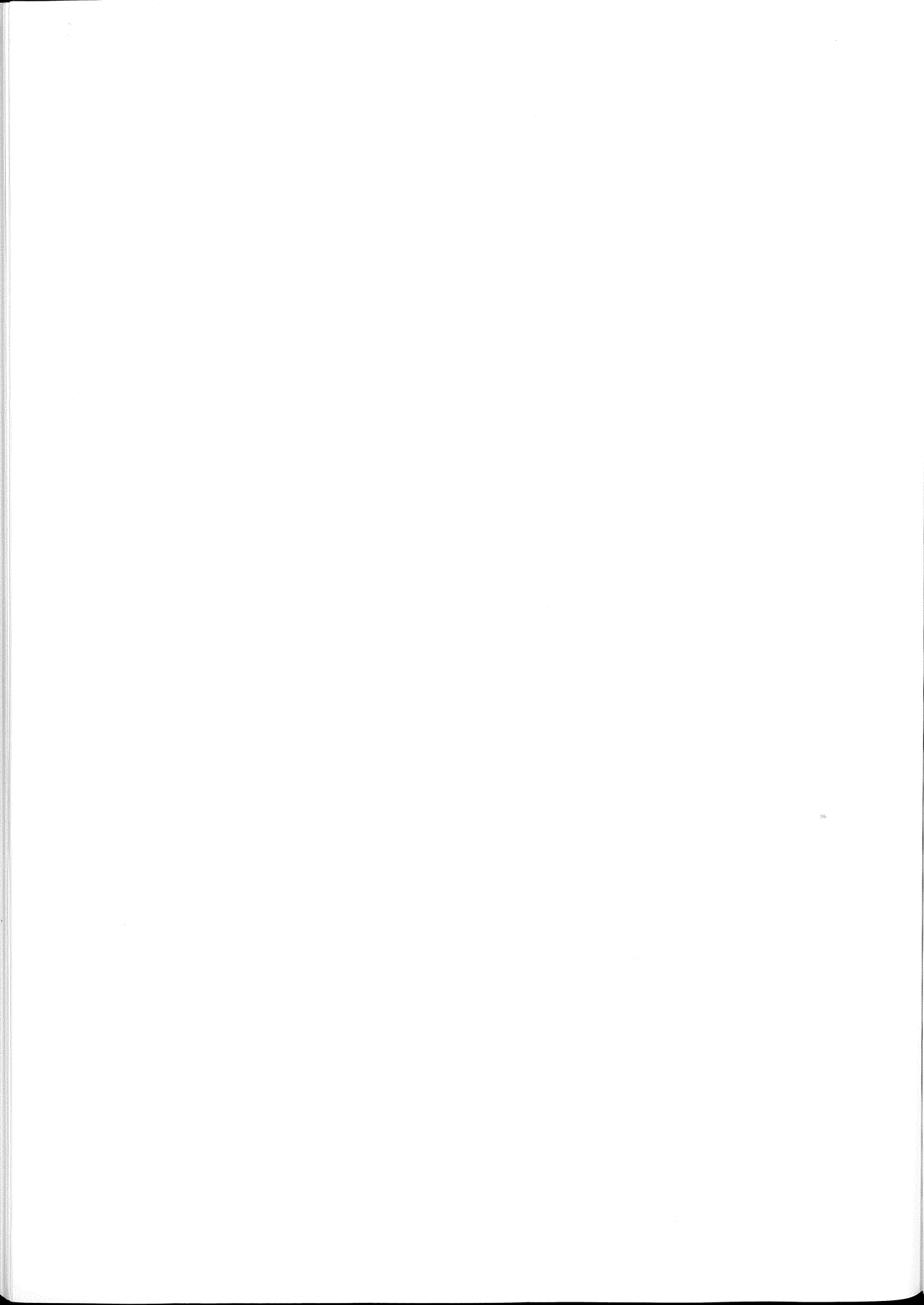


Fig.17 龍王崎6号古墳石室 (1/60)

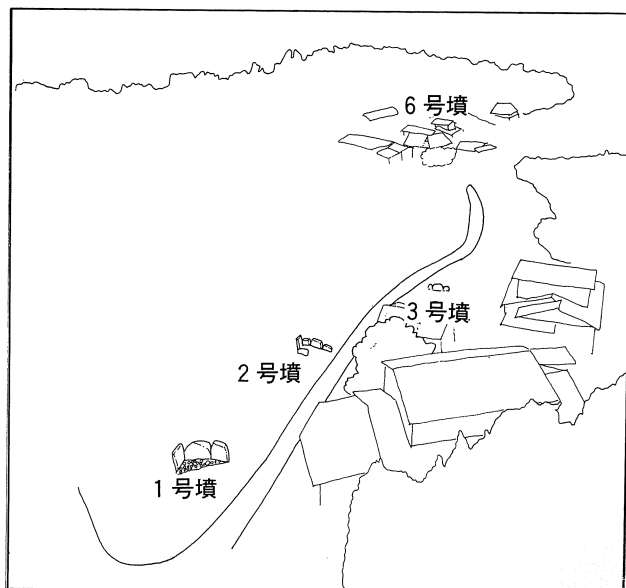
圖

版

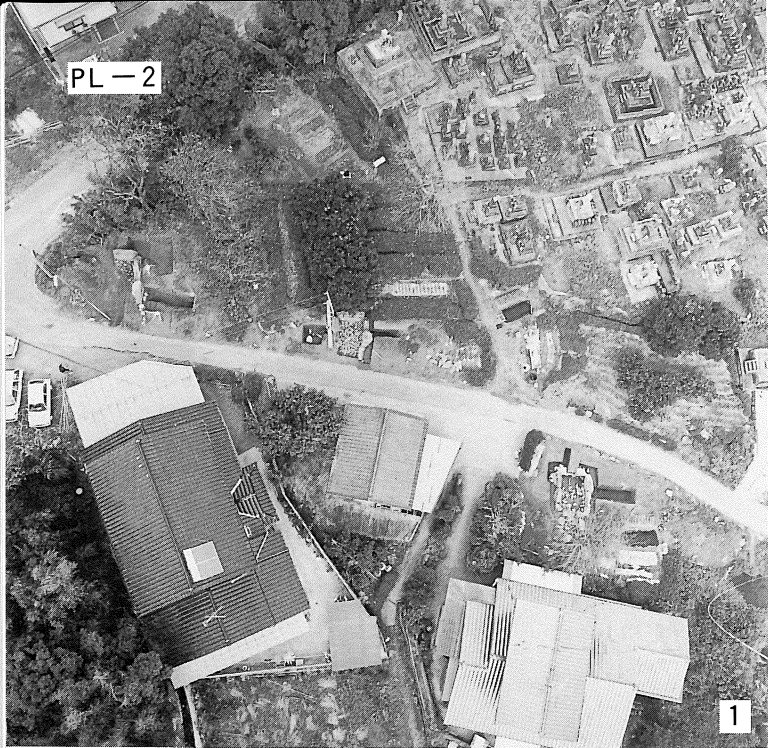




1. 遺跡全景（東上空から）



PL-2



1



2



3

1. 遺跡全景 (真上から)
2. 1号墳全景 (真上から)
3. 1号墳石室 (東から)

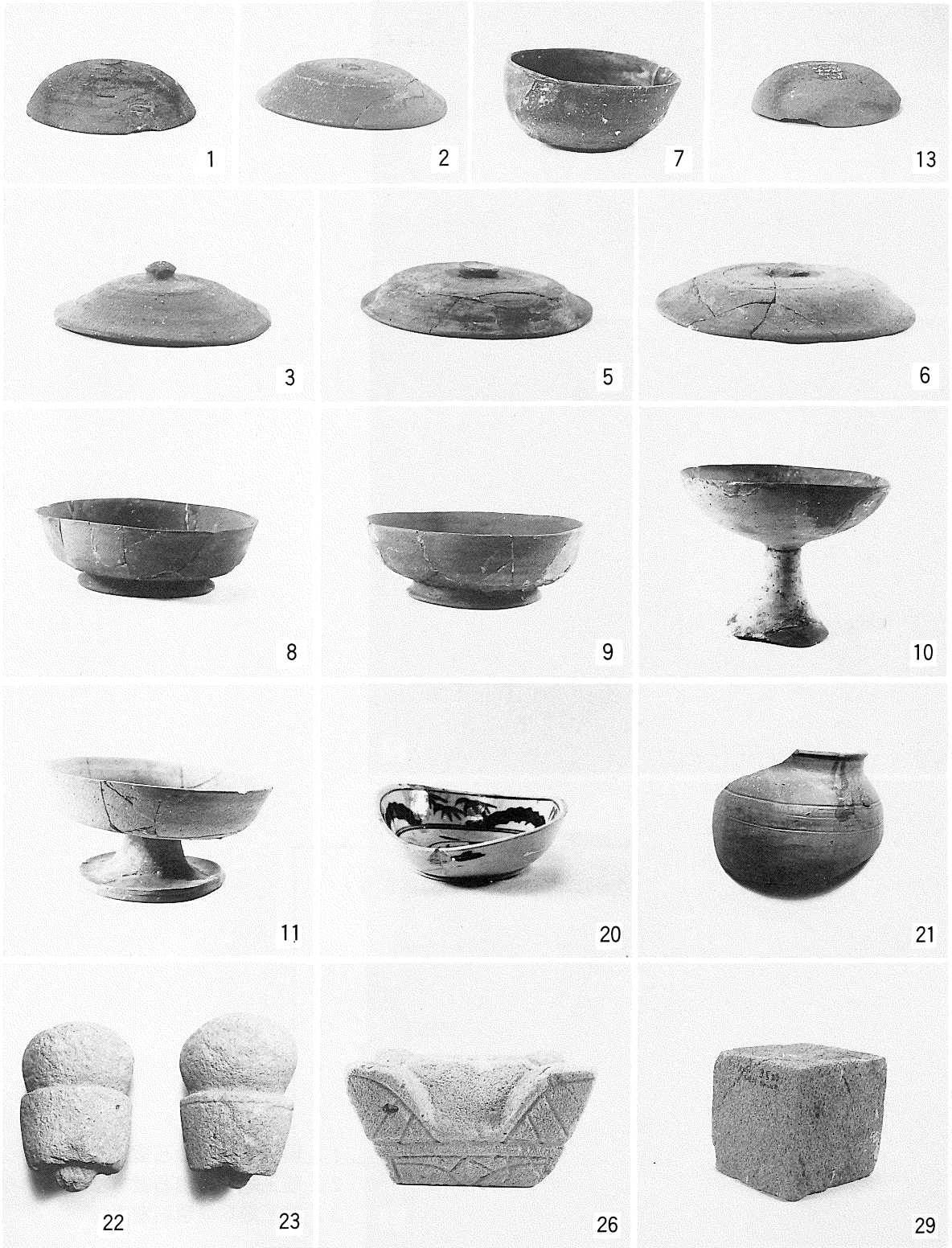


1. 1号墳石室 (南から)
2. 2号墳石室 (真上から)
3. 2号墳石室 (南から)
4. 2号墳出土骨

PL-4

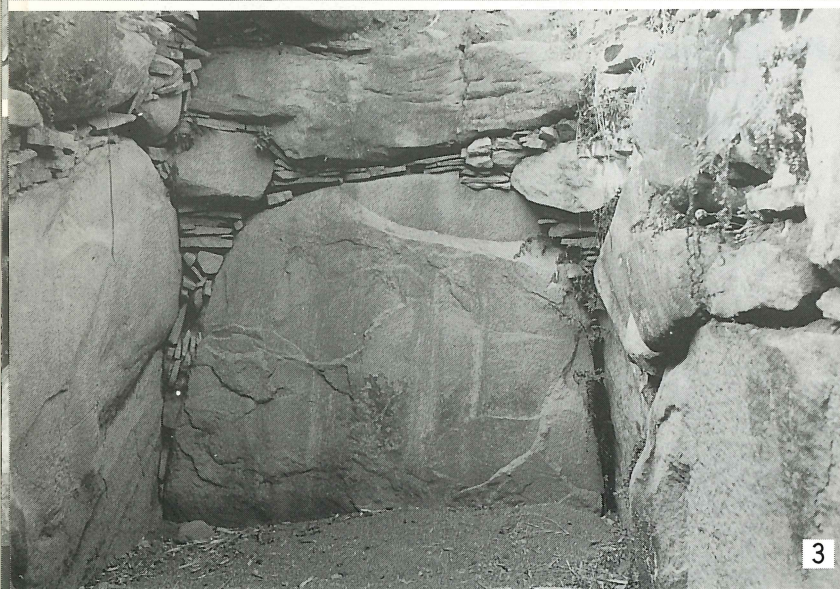
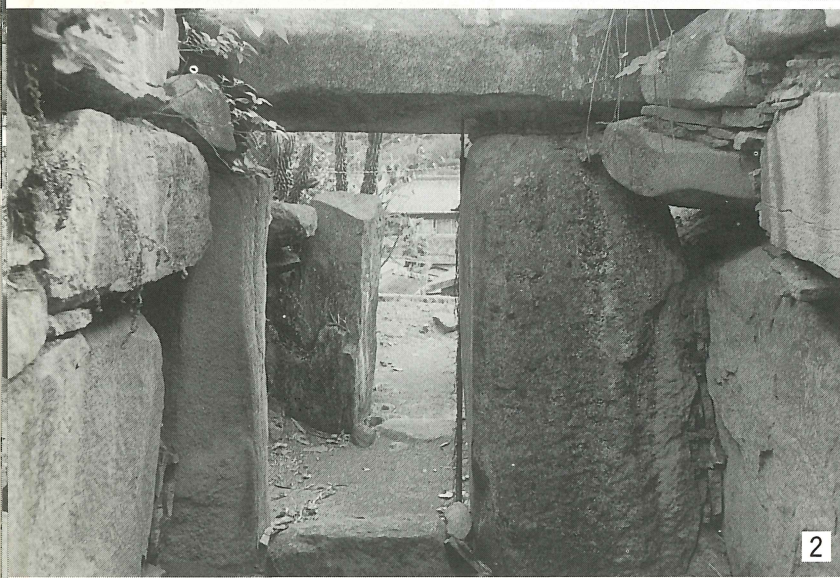
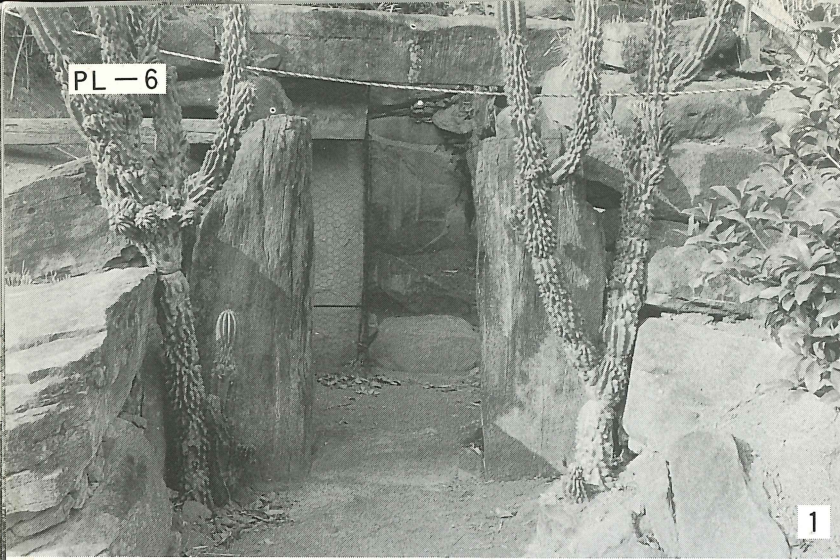


1. 3号墳全景（真上から）
2. 3号墳石室（北東から）
3. 3号墳遺物出土状況



1~13 3号墳出土土器
 20~21 2号墳出土土器
 22、26 2号墳出土石塔
 23、29 3号墳出土石塔

PL-6



1. 龍王崎6号墳石室（羨門側から）
2. 龍王崎6号墳石室（玄門側から）
3. 龍王崎6号墳石室奥壁

有明町文化財調査報告書第1集

龍王峠古墳群

1994年3月

発行 有明町教育委員会

印刷 (有) 弘文社印刷

佐賀市天神二丁目4-21

